



I はじめに

基調提案では部落差別問題と教育の重要性が語られ、差別的発言を受けて差別に向き合う生徒や過去の就職差別の事例が紹介された。教育が果たす役割や学力、社会的背景への理解が求められ、差別をなくすためには教育と対話が重要だと強調された。

分散会では、進路・学力保障に関わる小学校 1 件、中学校 1 件、高校 2 件の実践が報告され、討議された。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告①－

いつもそばに なかまがいるから
～ひとりじゃないよ～(大阪府人教)

－主な質疑と意見－

鹿児島 Aが涙ながらに家族のことを語り始めたが、遅刻が多いといったAの生活の背景はわかるか。また、差別は昔のことではなく、今でも続いているという言葉があったが、その差別の具体例を教えてください。

報告者 家庭の中で喧嘩が絶えず、Aが自分の思いを伝えられなかったり、朝の声かけがなされなかったりする状況だった。ただ、父親とも連絡をとる中で徐々に改善されていった。差別の具体例についてはネット上に溢れている差別や友人の結婚差別の話など。生徒たちはハツとした様子で卒業後に差別や偏見に出会ったらどうしたらいいかと質問していた。

奈良 不登校の生徒がどれぐらいいるのか。職員も含めた人権意識を高めるためのとりくみについて聞きたい。

大阪(報告者の学校) 本校では「不登校」という言葉は使わず、「休みがち」と表現している。ステップルームを設け、教室に入れない子どもは2割弱で、学習端末を使ったオンライン学習も行っている。人権意識を高めるため、校則はなく、一律の指導はせず、個別に寄り添った指導を行っている。

鹿児島 仲間づくりをするときに具体的にこう気をつけたり、いろいろ意識したりしていること、めざす仲間づくりで大切にしていること、モットーな

どがもしあれば教えてほしい。

報告者 子どもたちの中には自分の思いを出せないが、本当はつながりたいという気持ちをもっている子どもがいる。そのため、修学旅行や体育大会・文化祭で「一人では無理でも一緒ならできる」体験を大切に、声かけをしてきた。授業や休み時間では、勉強が苦手でも意見を伝える方法を工夫している。乱暴な言葉や行動を取る子どもたちの本当の思いを理解することが重要であり、その背景を考えるよう子どもたちや周囲に伝えている。「行動の裏にある思い」を学年通信や集会で呼びかけている。

徳島 休みがちな生徒児童の学力保障をどうしているか。子どもの仲間づくりをするための職員のつながりについて教えてください。

鹿児島 学習支援では、保護者への連絡で授業内容や進度を伝え、担任が使用したプリントや課題を渡してつながりを維持している。また、電話で児童に授業内容を伝え、オンラインやタブレットを使って課題を送付しているが、オンラインで進まない場合もあり、課題提出時には丸付けやコメントを加えて、休んでいる児童にも学習内容が伝わるよう工夫している。

報告者 本校では「学力保障」を重要視し、生徒一人ひとりに応じた支援を行っている。休みがちな生徒には、気軽に学習できる「個別学習の部屋」を提供し、集団授業が難しい生徒には少人数指導を行っている。自宅で学習が難しい生徒のために、放課後学習を毎日開催しており、定期テスト前には多くの生徒が参加する。クラブ活動と並行して行われ、自主的な学びを育む場となっている。授業では複数の教師が指導にあたり、生徒の理解を深めている。

鹿児島 子どもたちの仲間づくりには、教職員同士の協力が重要だと考えている。自己紹介やペアワークを取り入れ、仲間意識を深める活動を行っている。結果的に、子どもたちは男女関係なく仲良く過ごしている。しかし、教職員間の意見の違いを認め合うことが難しく、悩むことがある。保護者や子どもたちとの関係でも厳しい指摘を受けるが、それでも向き合い続けなければならないことが負担となっている。校内研修で連携を促進しようとしても、欠席する教員が多く進みにくい状況だ。

協力者 大人同士のつながりが難しいのは、私も思い当たる気がする。これに関して何か意見はあるか。

大阪(報告者の学校) 本校では、教職員が同じ方向を向いてとりくむことを重視している。方法は人それぞれだが、めざす方向性を共有することが基本。校内研修は班別研修が中心で、テーマを設定し異なる経験を持つ教職員が班を組むよう工夫している。これにより、異なる視点を持つ人同士が支え合いながら研修を進めている。テーマには「人権」「学力向上」「特別支援」などがあり、協力を促進する仕組みとなっている。

－報告②－

「社会をたくましく生き抜くために必要な資質・能力の育成」をめざして(京都府人教)

－主な質疑と意見－

福岡 他の子たちにも何かその子どもだけの役割があったのか教えてほしい。私も外国にルーツを持つ子どもの担任をしており、どういう大人になってほしいかという思いがあれば聞かせてほしい。

報告者1 小規模校なので、すべての子どもに役割を与え、個性を伸ばす機会を提供している。学習発表会では、恥ずかしがる子どもにも配慮し、適切な挑戦を通じて成長を促している。外国にルーツを持つ子どもには「主体的に生きる力」を育むことを重視し、個々の特性を尊重する教育をめざしている。低学年担当として、保護者の意向に沿うだけでなく、子ども自身の思いや意見を引き出し成長に繋げることが課題である。

鹿児島 子どもたちの学習支援や生活支援に関係して関係機関との連携をどのように進めていって、それを学校の活動にどのように生かしていくか。

京都 関係機関との連携は慎重に行い、いきなり連携を取ることはない。まず校内でケース会議を開き、生徒の状況(生活指導、家庭環境、発達特性など)を把握し、必要な支援を検討する。その結果、必要に応じてスクールカウンセラーやソーシャルワーカーを交えた戦略会議を実施し、家庭へのアプローチ方法を具体化している。関係機関の利用は、その家庭にマイナスの影響が出ないよう配慮しながら、適切なタイミングで行うようにしている。慎重かつ計画的に連携を進めている。

鹿児島 チーム担任制ユニット制について教えてほしい。

報告者1 チーム担任制導入には反対意見もあったが、実際に導入してみてコミュニケーションの重要性を実感している。教師間でタブレットを使って情報を共有し、得意分野を活かして協力している。以前は一人で抱えていた問題も、複数の視点で対応でき、教師の負担が軽減された。管理職も教師を尊重し、改善を共に考える環境があり、安心して働ける職場だと感じている。教師の働きがい向上し、子どもたちにも良い影響を与えている。

福岡 子どもたちのグループ分けについて大体どのような感じで振り分けられたのか。

報告者1 保護者間で不満が出ないようトラブルが起きないように今年は学力や資質能力を重視し、子どもたちを組み合わせる方針に変更した。低学年も同様に考慮され、個々の特性を踏まえて振り分けが行われ、子どもたちが安心できるような配慮も行われた。

報告者2 愛着に問題を抱える子どもが多く、大人との関わりがうまくいかないことが多い。子どものマイナスの行動も背景を理解し認めることが大切だと思う。学校全体でアプローチを続け、少しずつ良くなってきており、子ども同士や大人との関係を改善するために協力の機会を増やしている。

鹿児島 学校内の活動だけでなく、地域や家庭での支援も重要だと感じている。子どもたちが自主的に行動するような事例があれば、紹介してほしい。

報告者1 学校外での活動を通じて、子どもたちが成長し、それが保護者や地域にも良い影響を与えると感じている。相撲大会や修学旅行のお小遣いの決定など、自主的に行動することが、地域や家庭に繋がると考えている。昨年度の卒業生が地域でゴミ拾いを始めたように、学校の活動がきっかけとなり、地域に目を向けるようになった。

京都 家庭に返すことが難しい現状があるが、学校での子どもの自立が家庭にも良い影響を与えることが大切だと思う。失敗を通じて成長し、教職員と共に次に進み、成功したときには保護者にその姿を見てもらうことが重要。こうしたとりくみを繰り返すことで、地域全体の底上げが進むと考えている。

兵庫 以前の小中連携のあり方からどう変わったのか、また、ユニット制を始めるにあたって、どのような小中連携を考えているのかについて教えてほしい。

報告者1 ユニット制の影響か、最近学校間の交流機会が増えた。子どもたちも一緒に体育館で活動したり、運動会に参加したりしている。教員同士の仲が大事だと感じており、情報共有を促進するために、バレーボール大会や集まりを行っている。今、小中の繋がりが強くなっていると感じている。

鹿児島 外国にルーツのある子どもへの対応や、言葉の壁や人間関係の問題に対する学校のとりくみはどうなっているか。また、異文化理解を深めるための活動はどのように行われているか。

報告者1 言語の壁があると最初はコミュニケーションが難しいが、教師がいない場合は翻訳機を使っている。子どもには翻訳機を持たせ、大人や友達とも使えるようにしている。関わり続けることで保護者も学校の意図を理解し、良い関係が築ける。

報告者2 子どもたちは転校生を歓迎している。私たちの役割は日本語を早く理解してもらうこと。日本語教室を開き、教育の場を提供している。また、世界を旅するテーマで、メキシコ、スリランカ、サウジアラビアの文化を紹介し、子どもたちが自分の国の言葉で話すことで自己肯定感を高めている。

－1 日目総括討論－

協力者 今回この総括討論では繋がりというのを一つテーマポイントに置きたい。

大阪 進路保障について考えさせられた。報告で、固定された学力基準に苦しむ子どもたちとその影響について考えた。以前、日本語指導中に「話せるのに話せないふりをしていた」と言われ、最終目標は言語を教えることではなく、子どもたちが集団に溶け込み、仲間と繋がることだと感じた。ユニット制が子どもたちの繋がりを深め、ルールを整備することが学びや成長を支える大切な要素だと思う。

大阪 大阪の事例を通じて「繋がり」の重要性を実感した。小学校から中学校への進学後も繋がり続けることが教育実践の成長に繋がると感じた。先輩教師から「卒業生や保護者の姿が実践の答え」と教わり、それを現在の子どもたちに還元することが生き方保障だと思う。子どもたち同士の繋がりを大切に、外部との繋がりを支える仕組み作りが必要だ。

報告者 本校では最初、狭義の学力に注目していたが、教職員で話し合い、生きるための資質・能力を重視する方針に転換し、ユニット制を導入した。資質・能力は評価が難しく、短期間で成果は出ないが、これを続けることで子どもたちが生き抜く力を身につけると信じている。教職員間でこの信念を共有し、連携することが重要だと感じた。

報告者 日本語を理解していても話せない子どもたちがいる。これを受けて、周囲の子どもたちにも多様性を学べる時間を設けている。たとえば、インドからの転校生が来た際、インドの言語や文化について話し、クラス全体が学び、互いを理解し合える環境づくりに努めている。

大阪 子ども同士が自然に「繋がる」ことは難しいため、人権総合学習を活用している。さまざまな課題や人と出会い、「こういう人もいるんだ」と知り、その先の行動を考えている。かわいそうと思うだけでなく、「誰もが過ごしやすい環境」を作るための問いかけを進めている。最終的には、主体的に行動できる子どもを育てることをめざし、互いの違いを認め合う意識を育てることが重要だと考えている。

報告者 「学校総合プロジェクト」で、小中学校 3校の連携を進めている。テーマは「人と人との繋がり」で、これが子どもたちの成長の鍵になると考えている。幼稚園や保育園との連携も含め、子どもたちが自立し地域で支え合えるコミュニティを作り、「ここで頑張れる」と感じ、みんなで喜び合える場を築きたい。

協力者 「狭義の学力から離れる」重要性に気づいた。高校では「大学合格者数」を進路保障と捉えがちだが、子どもたちの成長を支える視点を広げることが大切だと実感した。

福岡 私の学校では、地域の小中学校や特別支援学校と連携し、授業計画の公開と意見交換を行っている。今年度は小学校の先生が授業を見学し、意見交換をした。これにより、生徒の自治活動や教育活動に良い影響を与えることをめざしている。「ここでなら頑張れる」という安心感から学力が厳しい生徒や不登校の生徒も体育祭や文化祭に積極的に参加し、協力する姿勢が見られる。ただ、生徒の選択を尊重し、無理に繋がる必要はないと考えている。

鹿児島 高校入学からトラブルが多かった自閉症スペクトラムの子どもが、小学校や中学校の先生方からの聞き取りを通じて、その成長を振り返った。たとえば、運動会でピストルを見ただけで逃げてし

まうことが分かり、ピストルをなくすなどの対応をした。中学校では症状について学年全体で理解を深め、その子も安心感を得た。トラブルが起きた時には図書館に行くようになり、周りの友達も協力するようになった。高校を卒業後は県外の専門学校に進学し、一人暮らしを始め、お母さんは子どもの成長に驚いていた。この経験から、子どもの成長を諦めずに続けることの大切さを感じている。

大阪 今日の報告で印象に残ったのは修学旅行の話。おこづかいが 3,000 円と決まった件で「自分たちが決めたから」と言った点が重要で、単に校則がないのではなく、社会を作る意義があると感じた。また、教職員間で伝わらない部分や、今までの「正しさ」を見直す必要があると感じた。少しずつ前に進むことが大事で、失敗しても、子どもたちがどうするかを語り合うことが重要だと改めて考えた。

報告者 学校改革で地域の変化は短期間では難しいが、保護者や地域との繋がりが重要だ。家庭との繋がりを意図的に作るのは簡単ではなく、学校がその場となる。「開かれた学校」として保護者が学校に足を運び、子どもたちの姿を共に見ることが地域との繋がりのきっかけになると感じる。

報告者 本校ではオープンスクールを頻繁に行い、保護者や地域の方々が学校の様子を見に来る機会を多く設けている。その中で、地域の方々から意見をいただいたり、子どもたちが地域で声をかけられたりする場面がよくある。最近、地域の方から「子どもがこんなことをしていました」と連絡を受け、その子と共に家庭を訪問した際、励ましの言葉をいただき、地域に温かく見守られていることを実感した。

大阪 地域総合学習で地域の人々との繋がりを大切に、施設やその背景を理解することで地域の思いを知り、繋がりを深めている。小中学校で培った繋がりが高校進学後も地域に帰れる場となるよう、学びの場を提供し、授業作りでは子どもたちや地域の思いを大切にしている。

京都 小中学校から高校への繋がりの大切さを改めて感じた。高校生から社会へどう繋げるかを今後考え直す必要があると思う。また、生徒の学力を下げないために生徒指導を厳しくするような発想がある。もっと生徒を信じていきたいと思った。

鹿児島 先生方の報告を聞き、繋がりの重要性を再認識した。学校での活動を通じて、子どもたちと共に学ぶことが大切だと感じる。本校では 1 年生から 9 年生が縦割りで活動し、前期課程の子どもたちが後期課程の子どもたちをサポートする姿が見られる。また、地域や保護者と協力し、子どもたちが成長に気づく機会を提供している。無理に繋がるのではなく、自然に助け合う方法を学ぶことが大切だ。今後もこのとりくみを続け、繋がりを深めて子どもたちの力を引き出していきたい。

大阪 「繋がり」について考えると、差別に関する価値観の重要性を感じる。差別をなくすためには、

反差別の価値観を向上させることが大切だと思う。特に部落差別問題での反差別の繋がりが問題解決に不可欠だと感じた。差別をなくさなければ、子どもたちを守れない。人の痛みを理解し、その原因をなくすことが重要だ。子どもたちが他者を傷つける原因を探し、解決策を見つけることが必要だと思う。地域での遊びや出会いを通じて、繋がりを深めることが大切だ。自分自身、日々の言動や行動で傷つけている人がいないか振り返り、苦しんでいる人々が声を上げられる社会を作るために、自分にできることを考え続けたい。

鹿児島 教職員の繋がりは学校運営に重要だが、進路指導では実績重視の傾向がある。特に公立高校では外部との連携が求められ、その繋がりを築くことが難しいと。また、不登校や通信制高校の生徒が増え、学校との繋がりが薄れている。これを解決するために、学校外での繋がりをどう確保するか、反差別の視点を含めて議論を深めていきたい。**協力者** 教職員の繋がりが生徒を支え、成長を促していると実感した。進路保障や多様性の重要性についても議論があり、部落差別など社会的問題に目を向ける必要があると感じた。また、困難を抱える人ほど繋がれない現実があり、子どもたちに繋がる力を育てることが課題だと改めて感じた。

2 日目

－報告③－

人権尊重社会の実現をめざすために(徳島県人教) －主な質疑と意見－

広島 子どもたちの課題に向き合う先生方の姿勢や、それを教職員全体で共有するとりくみについてお話を伺った。先生方が社会的弱者の視点を意識しているように感じた。教職員の仲間づくりについて、どのような工夫や意識を持って取り組んでいるのかと子どもたちの情報共有や教職員集団としての連携を図るために、学校としてどのような方針やとりくみを行っているか、お聞きしたい。

報告者 教職員は子どもたちに真摯に向き合い、生徒の前で責任をもって活動することを大切にしている。たとえば、授業時間を調整して充実したプレゼンテーションを準備し、内容を深める工夫をしている。また、校長や経験豊富な教職員がリーダーシップを発揮し、学校全体を導いている。教職員が「お互い様」の精神で助け合い、柔軟な考え方をもち業務に取り組んでいる。意見交換の場を作り、職場環境を整備することで、働きやすい環境を維持し、地域の特色に合った支援を行っている。

鹿児島 私も昨年まで通信制高校に 20 年間勤めていたが、通信制だと生徒がいろいろな背景を抱えていることが多い。教職員が個別に支援して、何とか卒業まで導けるケースも多い。卒業率はどのくらいか？卒業できなかった生徒はその後どんな進路を選ぶことが多いのか？感覚的な範囲で構わないので、教えてほしい。『社会の中で自分らしく生きられない状況が少なからずある』って書か

れていたが、めざすべきなのは、社会の中で自分らしく生きられる環境を作ることだとすれば、どんなふう意識して活動されているか。

報告者 通信制高校では、生徒の多様な背景に対応しながら卒業をサポートしているが、すべての生徒が卒業できるわけではない。引きこもりや家庭の事情で退学する生徒もおり、退学後は就労や他校で単位を継続するケースがあるが、支援が行き届かない場合もある。近年は公立より私立通信制が増え、地域ごとの連携が重要になっている。人権教育では、差別や偏見をなくすため、被差別部落やジェンダーの問題を取り上げ、生徒に正しい知識を教えている。ただ、現実には差別が根強く、教師はその現実に向き合いつつ、地域や専門機関と連携し課題解決に努めている。また、学校だけでなく社会全体で相談しやすい環境を整えることや、生徒が困ったときに頼れる力を育むことが重要だ。保護者や地域社会の意識を高め、差別を許さない姿勢を発信することも大切だとしている。

大阪 現在、人権教育の中で子どもたちが自分たちの意見表明権を学ぶことを意識しているが、子どもたちが実際に社会を作る感覚を持っているかどうかに対して課題意識を感じている。また、自身や家族が行政とのつながりを持ち、生きやすくするために権利を使えるようにすることを重視しているが、権利をうまく理解し使えていない部分もあると感じている。その上で、子どもたちが自分たちの権利について理解し、実際にそれをどう活用していけるかを学ぶ支援についても考えている。権利学習の支援の方法について、どのように進めていくべきか

報告者 自分の人権を守るためには、たとえば住民票を正しく登録し、必要な行政支援を受けることなどを伝えることが大切だ。働けない場合は、役所やハローワークに相談し、生活保護を受けることも選択肢だ。その後、状況が改善すれば働いて社会に貢献すれば良いし、差別的なことを言われたら言い返せるようにすることが必要だ。また、選挙に参加し、自分の意見を政治に反映させるために、今からしっかり知識を身につけることが大事だ。学校や生活では自分らしさを大切に、堂々と生きることが重要だ。

鹿児島 報告者が人権・同和教育にどういうふうにして出会ったか知りたい。

報告者 人権教育や同和教育との出会いは、私が教育現場で働き始めた頃から。最初は地域の問題にどう対応すべきか分からず、悩むことも多かった。しかし、地域の経験者と交流する中で、少しずつ自分の役割が見えてきた。その中で奨学金制度の導入など、地域の改善に向けたとりくみを進めることができた。教育現場では地域との連携が重要だと感じ、先輩教師たちから多くの学びを得た。地域や学校でのイベントやトラブルに対して協力して取り組む姿勢が必要だと実感し、今ではその経験を後

輩たちに伝えながら、人権教育を深めている。

－報告④－

専門高校における葛藤と進路指導

～学級担任としてのかかわりから～

(鹿児島県人教)

－主な質疑と意見－

鹿児島 定員内不合格を支持したということ、その上でこのレポートを書いた思いは何なのか、ここまで書けたということは、その後先生の気持ちの変化について。企業で理不尽な扱いを受けて悩んでいる卒業生が会社内で相談するような状況がなかったのか、会社内での生徒の様子を聞きたい。

報告者 専門高校として職業人を育てる責任を感じる一方で、基礎学力が低い生徒に対する偏見があったことに気づいた。生徒たちはそれぞれの未来を選んで進んでいくが、中には事故や挫折を経験する者もあり、その選択が正しかったのか悩むこともある。学校では定員割れや問題行動への対応に追われながらも、合格を支持する意見が増え、学校全体の雰囲気は変化しつつある。地域に根差した学校として、生徒一人ひとりに寄り添いながら、業界の期待に応える役割を果たすことをめざしている。職場で困難に直面した際、会社内の相談体制の不足が課題となっており、それを補う取り組みが必要だと感じる。生徒や同僚同士の支援が問題解決の鍵となる場合もあるため、今後は支援体制の整備が重要だと考えている。

鹿児島 就職後の理想と現実のギャップを減らすために、学校として取り組んでいることがあれば教えてほしい。

報告者 現実と理想のギャップを埋めるために、船乗り経験のある職員や自分自身の経験を共有したり、業界の人を招いて話をしてもらったりしている。また、できるだけ社会と接触する機会を増やすようにしているが、学校生活と就職後の生活の違いを完全に埋めるのは難しいと感じている。

大分 違反質問に対して「綺麗ごとだ」という企業の指摘は具体的にはどういうもので、学校側はどう対応したのか。また、違反質問への指導を学校側はどうしているのか。

報告者 違反質問の内容は様々で、どこまでが運用範囲なのかが問題だ。たとえば、船会社で船乗りになりたいという話をした際に、「親戚で船乗りをしている人はいるか」といった質問を受けることがある。これは面接前後の雑談の中で、悪気のない形で聞かれることが多い。保護者の仕事についての質問があった場合、学校としては相談を受けることがある。その際に、学校は「こういったとりくみをしています」と説明するし、生徒にも「答えないように」と指導している。これは大分県など他の地域と同様の対応だ。さらに、学校では違反事例をリストアップし、生徒たちが自分の面接が違反だったかどうかを確認できるようにしている。その後、学校は職安や県に報告するが、場合によっては学校側が直接会社の担当者に話をすることもある。特に

担当者や学校側で関係が深い場合、学校が直接対応するケースが多いのが現状だ。

鹿児島 水産高校では全県から生徒が入学して来ると思うが、中学校との連携はどの程度行われているか。公立学校では転勤が多い中、ずっと水産高校に在籍することにはどのようなメリットとデメリットがあるか。具体例を教えてください。

鹿児島 関連して、中学校からBさんについては支援シートとかそういったものはなかったのか。

報告者 中学校との連携を通じて特性のある生徒の情報を共有し、高校での支援や指導に活かしている。教員間の関係は濃密で、卒業後も生徒との関係が続くのが特徴だが、転勤がないため他校の指導法を取り入れる機会が少ないことが課題だ。卒業生や同窓会からの手厚い支援がある一方で、制度変更により制約が生じることもある。就職活動では特性や支援体制を企業と丁寧に話し合っているが、それでも3名中2名が退職した。就職後のフォロー強化が求められている。

鹿児島 水産高校では、インターンシップや職場見学など、就職前に職場を知るためのとりくみはどのように活用しているのか？また、それらを踏まえた支援について具体的なお話を伺いたい。

報告者 インターンシップや職場見学を実施しているが、職場環境が海上なので、簡単に実施できるわけではない。そのため、保険や体制を整えたうえで、海運局や国交省と連携し、県内の調整フェリーでインターンシップを夏休みに行っている。また、県外のインターンシップについては、船舶協会や組合と連携し、希望者には1週間程度の期間で実施している。

鹿児島 情緒学級の子どもが卒業後に就職する際、就労支援やジョブコーチのような支援が受けられるのか、またその後のフォロー体制があるのかという点に関しての不安を感じた。特に、療育手帳を持っていない情緒学級の子どもや、発達障害を持つ子どもが卒業後に就職した場合、就職先で特別な支援があるのか、またその支援が継続されるシステムが整っているかを知りたい。

報告者 海運業界についてはそういうふうな話は一切聞いたことがない。実際に現場で支援のとりくみをするようなところまでは、まだ船の業界では進んでいない。

徳島 通常の就労が難しい場合、徳島県の障害者職業センターで職業適性検査を受けることができる。手帳がなくても、どの程度の仕事ができるかを確認するために実技を通じて能力を評価する。この検査を受けることで、就職の際に障害者担当部署から支援を受けることができる場合がある。就労が難しい場合でも、センターを利用することで支援を受けられる。また、保護者の中には職業センターを利用したくない方もいるため、パンフレットを持ち帰ってもらうなど、保護者との連携が大切だ。支援担当者や協力しながら、保護者の理解を得て支援を進めることが重要だ。

兵庫 Bさんが辞める前に、企業の方に連絡をとったり、本人に声をかけるなどのとりくみや機会があったりしたのか。子どもが辞めた後、連絡は学校や担任の先生に行くと思うが、現場では目の前の生徒の対応に追われている状況もある。卒業後に気になる生徒について、行政や福祉、関連機関との連携が必要ではないかを感じる。現在、AさんとBさんはこうした連携を持っているか、についても教えてほしい。

報告者 Aさんは就職先で怪我をし、退職するかどうか相談があった。怪我により、仕事に対する恐怖感を感じていたが、将来的には戻りたいとの意向があった。航空機が好きな子どもで、現在は関西の空港関連の仕事に再就職している。一方、Bさんは辞めた後に会社から話を聞き、母親とも連絡をとった。Bさんは近くのコンビニで新しい仕事を見つけ、学校の職員がよくその店に行くので、ついでに声をかけることがあり、私も時々様子を見に行っている。仕事では失敗して怒られることもある。Bさんは私との連絡を避けているようだが、母親とは話をしている。関係機関との連携はまだ取れていないが、私自身や学校の職員が見守りを続けている。

福岡 差別をなくすために自分たちができることを教えている中で、学校の先生が感じる葛藤について聞きたい。困ったときに先生に頼ったり、友達に相談したりすることを促し、差別をなくすための行動を教えているが、先生が実際の現場で感じるためらいや葛藤について知りたい。

報告者 教師として、子どもが違反質問をされた場合、その報告をすべきかどうか悩むことがある。たとえば、子どもたちが不利にならないように配慮したいという思いがあり、違反を指摘することにためらいを感じることもある。そのため、業界団体との交渉や一般質問が発生した際には、本人や保護者に丁寧に説明をし、個別に対応している。しかし、時には子どもから「報告しないでほしい」と強く頼まれることもある。そのような場合、教師として正論を貫くべきか、それとも現場の状況に応じて柔軟に対応すべきか、ジレンマを感じることもある。

Ⅲ 総括討論

鹿児島 就職の進路指導に携わる中で、なかなか差別性が見えにくくなっている。面接の中で、趣旨違反に当たる可能性がある質問があったとしても、内定を得られれば、教員の気持ちも、内定の方に傾いて、企業を追求しにくくなることもあるし、不合格の場合には、学力が十分でなかったなどの理由で企業からはぐらかされてしまうこともある。こうした中で、九州地区の学習会の中で聞いた、「就職差別の取り組みは、ルールだから取り組むのではなく、通報するのが目的ではない。子どもたちを差別から守るために取り組んだ」という言葉が腑に落ちた。こうしたことをしっかり認識しないと、なかなか就職差別はなくならないと思う。教育行政、

労働行政、そして学校が一緒になって、この差別をなくすという取り組みをしていくというふうを考えているので、決して企業だけを置き去りにしてはいけないと思う。また、制服に関して、うちの学校も女生徒がスラックスを選べるようになっている。ただ、ある時に数人の生徒から「所詮は女子の制服です」と言われた。その気持ちに自分自身寄り添い切れなかった。そのことが忘れられない。あと、反差別の取り組みについて、部落問題を学習する際に、当事者の方に来ていただいて、研修することがある。当事者の思いをしっかりと受け止め理解することは大事なことはあるが、学んだつもりでいる自分たちがいないかということも、点検しなければならない。

鹿児島 (徳島の)報告者にさきほど質問したのは、どのような思いで人権・同和教育に向き合い、どのような実践してきたか答えてもらいたかったから。自分自身は、部落のお父さんに出会って、それから人権・同和教育に向き合うようになってきた。**報告者(徳島)** 私が同和教育と出会ったのは、校務分掌。「被差別部落の子どもはスタートが違う」…というのが先輩の言葉で、それ以上教えてもらえなかった。だから、いろんな本を読んだり、話を聞いた。また、高校生が自主活動をするが、もし部落差別がなければ、運動や趣味など、自分の時間を他に使える。

徳島 徳島県では、就職差別に関わる14項目を中学生、高校生の時に学ぶ。この学習を通じて、どのような質問が就職差別につながるかを理解したうえで、就職試験に臨んでいる。また、就職試験で企業側には、履歴書、調査書を送る際に、高等学校、特別支援教育学校の人権教育研究会が作成した就職差別に関わる重要項目と、血液検査などの検査を行わないようにという依頼文書を併せて送ることになっている。また、県の人権教育研究協議会では、労働局、経済団体、県教育委員会と会議を催して、就職差別の問題に取り組んでいて、事象が起こった際の流れもできている。労働局からも企業側に周知しているが、現状では、徳島県で就職差別に繋がるような質問があった企業は、これまで関わってきた指導員が退職されて後任が決まっていなかったり、急遽別の人が面接に関わる中で、就職差別に関わる14項目のことを十分に理解できていない人が面接をしているケースがほとんどだった。人間の社会はだんだん入れ替わっていくものだから、常に継続的にやっておかないと我々の時点で解決したと思っけていても、また元に戻ってしまうことも往々にしてある。だから、そういった中で繋がりが、継続していくのは非常に大切。

協力者 宮崎県でも同様の取り組みをしており、どの都道府県であっても、多分似ているところはある。ただ、自分の経験として、違反質問について集約をする時にたくさんあがってくる学校と全くあがってこない学校がある。これは、担任だったり進路指導担当だったりのアンテナの張り方も影響

しているのではないか。

鹿児島 自分は今年から公務員になり部落差別という言葉自体あまり聞き馴染みのない初めて聞くような言葉だった。被差別部落のことも、自分の身近な地域にあることを最近知った。もし、学生の頃に当事者の話など部落差別に知る機会があれば、自分の考え方も変わっていたかもしれない。自分自身は、進学が中心の高校出身で、違反質問や就職差別に関することも学生の時には教えてもらえなかった。質問は、進学が中心の学校で、就職差別に関してどんな取り組みをしているか知りたい。

徳島 徳島県の場合には、全てで取り組みを行っている。違反質問が出た場合に、「その質問は、就職差別に繋がる14項目に当たりますのでお答えすることができません」と、主張するように伝えている。ただ、進学が中心の学校の場合、生徒たちの意識がどこまでのものであるか分からない。大学、短大、専門学校なりに進学した後に就職する場合にも、エントリーシートや面接で就職差別に関する14項目に抵触するような事案があると聞いているので、就職だから、進学だからというようなことではなくて、違反質問自体が不適切であり、差別選考に繋がるということを行行政や業界を巻き込みながら取り組んでいくことが必要ではないか。

協力者 奈良県の高校では、進学の割合が高いかどうかに関わらず、趣旨違反質問も含めた就職差別の問題は扱っている。そして、就職差別に対する取り組みとの関連で部落差別のことを学ぶ学校もあれば、本人の資質や能力に関係のないことは問わないということに焦点をあてて取り組んでいる学校もある。今自分の数勤務する学校では、部落差別問題との繋がりを意識して、2年生で部落差別のことを学んだ上で、3年生の時に就職差別の問題を取り扱い、その中で奈良県内の部落出身の高校生が立ち上がったところから話をしていきます。2年生の時に学習する際に部落差別のことを学んできたかどうかというアンケートを取ると、現状半数ぐらい。もちろん地域によって差があるが、小中学校の段階で、部落のことを全く学んでこなかったという割合が結構増えている現状がある。ただ、自分自身は部落差別のことを抜きにはできないと考えている。それは、今もなお残念ながら部落差別はあり、インターネット上で記号化している部分もある。そうした中で、高校段階では「最後の砦」として、子どもたちが社会に出て、部落差別と良くない出会いをしてしまわないようにという思いで取り組んでいる。

協力者 先ほどの(鹿児島の)発言で、自分の住んでいる地域に被差別部落があることを初めて知ったということだが、今後部落差別が自分の暮らしに関係あるどうかを、自分の生き立ちも含めて振り返りながら、深めていく必要があるのではないか。自分自身も教員になってから初めて部落のことを知った。しかし、同時に自分の中に部落差別が根付いてしまっていることにも気付かされた。だか

ら、これからも様々な出会いの中で深めていってほしい。

京都(報告者の学校) 初任者の時に先輩から「やっぱり差別って人の心の中にあるよな」ということを言われた。どうしても人間は弱いので、自分が誰かよりも上に立ちたいというような時に、差別する心が表出してしまう。だから、まず自分に対して矢印を受けていく必要があると同時に、そういう人がたくさんいる社会になっていくことによって、子どもたちが社会に出て立ち立ちをして、しっかり生きていけるようになることを願って、今6年間子どもたちを預かっている。そのように考えた時に、社会で誰かが困っていたら、他の誰かが助けるような、そんな社会になっていかなければならないと思う。そして、差別をなくすためには、お互いの良い所を、個々人がもっとリスペクトできるような社会をめざし、自分の自由を大切にするとともに、隣の人の自由も守る、そのような自由の相互承認をしていける空気感を作っていきたい。

IV まとめ

この大会では「事実と実践に基づいた報告」が大切にされてきた。子どもたちが抱える困難やしんどさなどの生活実態という事実に対して、学校や教員など色々な立場からどのように関わっていったのかというのが実践というように理解している。全人教では「進路保障は同和教育の総和」ということが言われるが、今回もそのような趣旨の話があった。1つめには、いわゆる点数としての狭義の学力保障と、広義の学力保障についての討議がなされた。また、進路保障は、学力保障や学習保障であり、引いては生き方保障につながるということも議論された。生き方保障は、自分で自分の人生を切り開き、困難な状況にも立ち向かっていく力を育てていくことだと理解している。自己責任という言葉のもとに、バツサリと切られてしまう現実がある中で、人権教育では、「0歳からの進路保障」ということも言われている。その子が生まれてから、成長して、学んで、社会へ出ていく中で、切れ目なく進路保障をし、一人ひとりに関わっていく大切さを感じている。さらに、就職差別の問題についても、先達の取り組みを再確認できた。趣旨違反質問の件数が多かったか少なかったかではなく、雑談の中だったから許されるものではなく、差別性があったかどうかに関係なく許されるものではないし、そうしたことを教員が子どもたちに伝えていかなければならないと改めて感じた。そして、反差別のなかまづくりについても、取り上げられた。奈良県内の中学校でかつて荒れがあった学校では、なかまづくりは差別やいじめを生む、だからなかまづくりを大切にしてきたと聞いて、はっとさせられた経験が自分自身にある。なかまづくりの出発点は、子どもたちの生活実態やその生活背景を知るところからスタートする。その中で子どもたちがどうなっていきたいかという願いのもとに、子どもたちが安心

できる環境を作ることができてはじめて出会いがあり、出会いがあつてそこから子どもたちが繋がっていき、最後には自分の生き方を自己決定できるようになる。そういう営みが反差別のなかまづくりであり、人権教育そのものではないか。その繋がるなかまも、子どもと教員、子どもと子ども、保護者と教員、また教員と教員、子どもと地域、地域と地域、いろいろな立場で繋がっていくことが、進路保障になるということはこの2日間を通じて感じた。